- 海外・他施設とのセミナーの開催
- 男性育休取得促進のためのセミナー

# パパ育休セミナー「パパ育休取得を応援しよう」

日時:2023年9月19日(火)16-17時

開催:オンライン(Zoom)・オンデマンド視聴



## ♦ 講演録

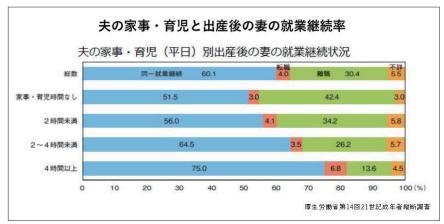
## 1. 講 演 「パパ育休~育児・介護休業法が改正~」

座長:牛込恵美(食と健康研究講座 講師) 講師:岡田博史(内分泌・代謝内科学 助教)

初めに、大前提として男性の育休というのが絶対の正義ではなく、結婚や子どもがあるべきではない、独身や子どものいない様々な人がいて組織、社会が成り立っているので、パパ育休は絶対ではないということをお断りしておきます。

私が卒業した2004年のころは、研修医は夏休みも他の休みも取らずに病院に泊まってというのが当たり前の時代でしたが、現在我が国では、厚労省がパパ育休を推奨して、法律の整備がなされています。

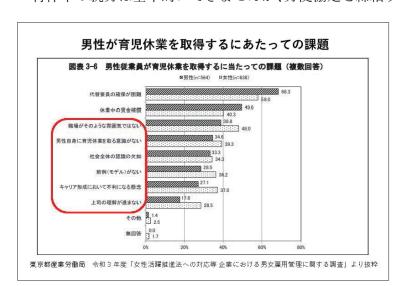
まず前提として共働き世 帯は増えており、特に医療 職、医師の共働きはかなり 多いです。厚労省のデータ によると、夫の家事・育児 の時間が長いほど、妻の就 業継続状況は高くなります。 また、女性の社会進出が進 むと男性の寿命が延びると いうデータがあります。



このようなことを踏まえ、やはりパパ育休は重要だと思いますが、我が国の男性の育児休業取得率は非常に低く、本学においても低い状態です。男性が育休を取得するにあたっての課題ですが、スタッフの確保が困難ということや賃金の問題が大きいのですが、職場の雰囲気や男性自身の意識、社会の認識など解決できそうな課題もあります。

昨年の10月に育児・介護休業法が改正されました。子どもが生まれてから8週間以内に28日まで取れる休暇を産後パパ育休と呼び、2回に分けて取ることもできます。8週過ぎてからは育児休業となり、これも2回に分けて取ることができるので、妻の就業等に合わせて取ることができます。

育休中の就労は基本的にできませんが、労使協定を締結すると産後パパ育休中の就労は可能です。

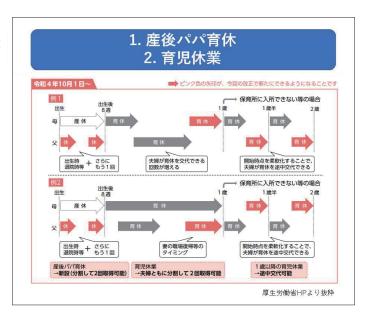


子どもが1歳以降も保育所に入所できない場合は、延長されてママとパパが交代で取ることもできます。

厚生労働省のHPには、育児休業等を理由とする不利益取り扱いの禁止、ハラスメント防止が明記されており、そのようなことがないように、雇用主は育児休業を取得しやすい環境整備や個別の周知、意向確認の措置を取る義務が課せられています。また、従業員1,000人超えの企業は2024年4月から育児休業の取得状況を年1回公表することが義務付けら

れています。

有期雇用職員の育児・介護休暇の取得要件に、子どもが1歳6ヵ月までに契約満了することが明らかでないということが決められています。そうなると、専門医制度において1年ごとに職場を異動する場合は、育休を取得できません。育休だけではなく、専攻医の雇用体系によっては、有休休暇自体が与えられないという我々医師の特有の問題があります。そもそも、勤務医の2割が未だ年960時間超え労働というデータがあり、そういった中で育休を取るスタッフの穴をどう埋めるのかという問題もあると思います。



男性育休のこれからというのは、組織や上司の理解、個人の意識やキャリア形成の問題等ありますが、長い目で見ればむしろキャリア形成のプラスになると思いますし、皆で共有すべき問題であると考えます。

# 2. パネルディスカッション 「育休取りました!」男性育休取得者経験談とパネルディスカッション

パネリスト:垂水洋輔(女性生涯医科学 助教)

愛知高明(視覚機能再生外科学 後期専攻医)

岡田博史(講演講師)

#### ① 育休体験談

#### 1. 垂水洋輔

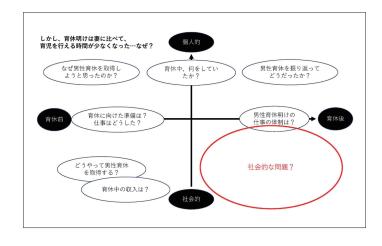
昨年10月に妻が出産し、11月にパパ育休を1ヵ月取得しました。なぜ育休を取ったかというと、 出産前からお互い仕事を続けたい、興味あることを続けたい、そのためにはどちらも育児・家事 ができるということが必要で、男性育休を取得しました。一方。育休を取得することでキャリア の中断や職場での立場についての不安がありました。

育休取得の3ヵ月前に教授、医局長と外勤先に相談して承諾してもらいましたが、週1回の外来だけは引継ぎが難しかったので、パパ育休制度でここだけは仕事を続けていました。医局で

初めての試みだったので、 次に取る人が取りにくく なったり不備がないか不 安でした。

育休中実際何をしてい たかというと、赤ちゃん は1時間半か2時間寝たら ぐずり、ミルクを準備し て、寝かしつけてまたし ずる、という繰り返しで、 ずる、という繰り間がな ほとんど自由な時間がな く、なんとか妻と情報共





有をして、それぞれまとまった睡眠時間 を取れるように工夫しました。それでも、 ストレスや疲れは蓄積していくので、週 の1、2回は両親など外部の人に来てもら い、ようやく2週間後から育児を楽しみ、 家族や職場への感謝を感じられるように なりました。食事はゆっくりできないし、 少しでも時間ができると自分が寝てしま うし、家族サービスどころか自分たちが 生きていくのに必死の状態で、理想と現 実の違いを痛感させられたひと月になり

ました。

男性育休を振り返ってとてもよかったと思います。育児スキルはもちろんのこと、育児環境や意識の変化、例えば育児の「協力者」ではなく「主体者」という意識を持ち、社会参加に興味が出ました。仕事復帰に関しては周囲のおかげでほとんどストレスなく、職場に感謝しかありません。一方、男性育休を休みと思われていないか、復帰後に仕事を任せられるのかという不安はありました。職場復帰後も早く帰宅させてもらうことはありましたが、育児に費やす時間は少なくなりました。当科では育休明けの女性は当直免除もしくは回数を減らすということがありますが、男性にはなく、平日の日勤以外に院内にいる時間は圧倒的に男性のほうが多くなります。ですので、男性はそもそも家にいる時間が女性より少ないので育児にかかる時間が少なくなると思いますし、他科ではどうされているのかなと思っています。

産婦人科で初めて男性育休を承諾してくださり、仕事の引継ぎや、外来患者の緊急入院などの対応をしてくださった医局の先生方には感謝しかありません。一方、今後、男性が女性と同等に育児を担い続けていくためには課題も多いと感じました。

#### 2.愛知高明

家族は内科医の妻と長男3歳、次男1歳で、次男が生まれたときに生後1ヵ月で育休を取りました。 育休を取得した背景は、妻が産後1ヵ月に学会発表があり、育休を取ってほしいと言われました。(育 休を取得した際の所属の)琉球大学では男性育休を取るのが当たり前という感じで、職場から育 休取るよね、と声をかけていただき、取りづらい雰囲気は一切ありませんでした。上司からは育 休中に論文を書くようにと冗談っぽく言われましたが、上司も子育てをされていて育休の大変さ を理解していただいていました。育休取得の手続きも書類を数枚書くだけだったので、取得のハー ドルはとても低かったです。

育休中のタイムスケジュールですが、朝6時~8時に朝食や身支度を行い、8時~9時に長男を保育園に連れて行きました。日中は次男の面倒を見たのですが、生後1ヶ月のころはとてもよく寝てもよって、すごく苦労したという感じはなかったです。役割分担としては、日中は私がみて、夜は妻が起きてみるという感じでした。長男も赤ちゃん返りすることもな



く、次男の面倒をよく見てくれました。

育休を取ってよかったことは、一番は妻への感謝が大きいと思います。育休中も夜は妻が起きてくれたので、私はしっかり夜眠れました。育休中の1ヵ月間、子どもの成長を間近で見られたこともよかったです。そして、仕事と家庭のバランスを考えるきっかけになりました。

育休を取って大変だったことは、1日があっという間に過ぎてしまい、時間管理の難しさを感じました。あとは経済的な問題で、育休中も給料は出ていたんですが、普段の3分の1くらいになり、ひと月だったのでそんなにダメージはなかったですが、3ヵ月や半年取ると経済的に大変になると思いました。次男はよく寝てくれて楽なほうだったと思いますが、それでも精神的なストレスはありました。

育休が終わって2~3ヵ月のころに、私以外の家族が全員風邪をひいて、仕事は休めないし、そこが一番大変で、やはり育休はひと月ではなく、2、3ヵ月や半年取れるのが理想だと思います。 育休を取って、一人で子育てをするのは無理だと確信することができました。育休前に上司に 論文を書くように言われていましたが、一日が怒涛のように過ぎていき、自分の時間を取ること は全くできませんでした。

育休を取れば、家庭は円滑に回ると思いますが、その分自分のキャリアにマイナスに働いてしまうと思うので、いかにそのバランスを取るか、特に妻の場合は半年以上職場から離れるので、キャリアと育休のバランスというのは永遠の課題になると思います。

#### ② パネルディスカッション

Q:管理者の立場から、いつまでに育休取得するというのを伝えてほしい等ありますか。

A:正直、積極的に男性育体をぜひ取れという立場ではありませんでしたが、仕事も趣味もアクティビティ高く行う先生からの申し出だったんで、よい機会だと思い承諾しました。時期的には産婦人科では急に言われても問題なく対応できると思います。これをきっかけに当科ではほぼ全員パパ育休を取るようになったので、ひとつの契機になったと思っています。

- ・パパ育休を取ることがキャリアにプラスになるというように考えられる職場を作る必要がある と感じました。取得がキャリアにマイナスになると感じる社会全体の意識について考えていく 必要があると思います。
- ・医師としてライフイベントを経験することは非常に大事で、患者さんの立場もわかるようになるでしょうし、また、育休を取ることで時間の使い方がうまくなると思います。育休を取った 人たちが上司になったときに、育児と仕事のバランスについて心から理解できると思います。

